

ホームで結び直した母娘の絆

松本侑壬子・ジャーナリスト

前作『老親』（2000年）に続いて槇坪監督が老いと家族の姿をテーマに描く最新作。久田恵の体験記を基に、仕事を持ちながら母親の介護に明け暮れた一人のシングルマザーの“大いなる試練”の13年間と、結び直した家族の絆を労るような温かなまなざしで描いている。

フリーライターの泉（紺野美沙子）は45歳。もう7年間、脳血栓で半身不随になった母・道子（馬淵晴子）の在宅介護と子育て、そしてときに長期出張を伴う取材・執筆の仕事を続けてきた。20歳で家を出て、7年前に母が倒れてから18年ぶりに帰宅したのだが、70歳まで仕事人間だった頑固な父・賢一郎（小林桂樹）とは介護をめぐる喧嘩が絶えない。そのほだまで一人息子・遼は小学生でチック症になり、作文では「僕にはお母さんがいない」と書く始末。高校に入ると不登校になった。それでも仕事は捨てられない。

孤立無援の泉を救ったのは、取材で訪れた都内の有料老人ホームの施設長・悠子（野川由美子）の一言だった。「介護はプロに任せて、仕事をなさい」と言われて、迷わず入所を決めたのだった。

ホームには痴呆も末期がんも半身不随の患者もいて、亡くなる人もいる。しかし、ここではいつも主役は老人たちであり、「NOを言わない」方針の下にのびのびと明るい雰囲気が保たれている。原作者の実体験に基づいているというが、この施設のあり方やセリフには、老人や家族にとってさりげなくゆいところに手の届く知恵がふんだんに込められている。愛する人を安心して託せる場所とは、家族自身が安心を与えられる場所なのだ

ということが素直に伝わってくる。

やがて無表情だった道子は笑顔を取り戻し、ホームは“母の居場所”となり、“家族の場所”となる。一緒に入所した賢一郎も、かつては考えられなかった変身を遂げ始める。新しい夫婦関係に目覚めて結婚以来初めて家事まで取り仕切るようになる。息子の遼も、ホームの若い男性スタッフとの交流から自分の行く道をつかんだようだ。そして、泉にとっては一。

泉の母への思いは、幼少期から“満たされない愛”だった。思い出すのはいつも冷たい母の仕打ち―「仕舞い」を舞う母にすぎりつく4歳の泉を邪険に振りほどく。10歳の泉に「あなたには結婚は向かない」と言い放つ…。なぜ？ お母さんは私を嫌いな？私を見て！ 思えば、これまで何事にもがむしゃらに頑張ってきたのは、「お母さんに認めてもらいたい」という一心からではなかったか。

泉が、思いもかけず母の孤独を知ったのは、ふと見た母の短歌からだった。“悔やむまじ、たとえ冬野に吾ひとり、風が枯れ木の枝鳴らすとも”。荒涼たる心象風景を胸に、母は孤独に耐えて毅然と仕舞いを舞っていたのか。その矜持を受け止めて、今、言葉も発せぬままに最後の時を生きる母と手を握り合う泉。精一杯生きてきた母の心を糧に本当の自立へ踏み出せそうな気がするのだった。

生きる厳しさと切なさを温かく包んで、心の深いところに届けられる感動の母娘映画である。

槇坪監督は6本目の本作で、ついに42年ぶりに女優/監督・田中絹代の記録に並んだ。日本の女性監督が撮った作品の数の記録である。



日本映画（116分）／槇坪多鶴子監督

『母のいる場所』

4月9日～22日まで岩波ホール（東京）で公開。その他、全国各所で随時公開。

